

ビジネス基礎との連携で簿記の理解を深めよう

商業 簿記 第1学年

石川県立小松商業高等学校・教諭

1 事例の概要

入学前には商業高校で学びたい科目として「簿記」を挙げた生徒のなかにも、入学後、苦手とする者がいる。理由は、生活体験が少ないため、経済社会のイメージがわからなかったり、簿記を何か特別なものであるかのように考えたりするからである。そこで本校では、基本を何度も繰り返す反復練習をするとともに、関連科目のビジネス基礎とリンクさせ、総合的な視点から生徒に学力が定着するよう試みている。

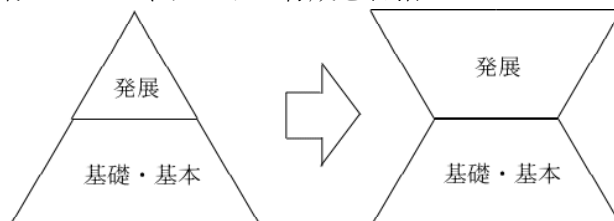
2 実践内容

(1) 単元の目標

- 当座預金と小切手の仕組み、当座預金に関する記帳方法について理解させる。
- 商品代金の決済に用いられる約束手形・為替手形の内容と、手形の振り出し・決済・裏書譲渡・割引の記帳方法を理解させる。

(2) 指導上の工夫点

① 商業のスペシャリストの育成を目指して



生徒の可能性と知識の広がり

しっかりとした基礎基本があれば、発展は広がる。
また、自信が生徒を支える。

② 習熟度を取り入れた、きめ細かな指導の徹底

簿記は、商業における基礎的な科目であり、商業科における3年間の学習の柱である。簿記の理解により、商業科目全般の理解を容易にするためにも、個々の理解度に合わせ着実に身に付けさせる必要がある。本校では、簿記の学習を通して学び方を学び、やればできるという自信を持たせる科目として簿記を位置付けている。生徒の理解度の違いに対応するため、3クラスを4セクションに編成する習熟度別学習を取り入れ、知識定着の工夫を行っている。

③ 科目間の指導のリンク

ア 「簿記」と「ビジネス基礎」の科目担当で単元の打ち合わせを行い、簿記の進度に合わせてビジネス基礎の教える単元順の調整を図る。

イ 基本問題を何度も繰り返し、誰にでも理解できる簡単なものだとすることを理解させる。

ウ 発展的・応用的な事例を最後に示し、応用力と簿記に対する「自信」を身に付けさせる。

④ 学習成果確認のサイクル

ア 基本問題に繰り返し取り組む姿勢が、学習成果を定着させる意欲を喚起する。

イ アの学習成果により、資格試験に挑戦。学習成果を確認することにより自信をつける。

ウ 自信が、商業のスペシャリストを目指して発展的・応用的問題に取り組む姿勢を産む。

以上ア～ウの学習過程を考慮して総合的に行う。



B-1 シラバス（ビジネス基礎）

B-2 シラバス（簿記）

B-3 評価の観点等（ビジネス基礎）

B-4 評価の観点等（簿記）

3 指導の実際

内容と手順	学 習 活 動	他の科目との連携 (ビジネス基礎)
小切手について ①基礎知識	代金決済の方法① ビジネス基礎での理解の確認 (ビジネス基礎の復習) ・具体的なイメージを持たせる  小切手と当座預金の関係を理解 	簿記の学習前に、小切手について学習し、小切手の作成実習をする
②簿記の記帳	預入・振出と受取りの勘定科目の違いの理解 ・仕訳を通し、受取りの時の現金扱いを注意 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">簿記で小切手の理解度を確認し、ビジネス基礎担当者とリンク</div>	

C-1 指導計画

4 成果と課題

(1) 習熟度を取り入れた、きめ細かな指導の徹底

この取組により、「①生徒が授業全般に真剣に取り組むようになった」「②受け身的な教育から生徒自身が諦めない学習へ」等、生徒の意識が変わった。これは、1年次11月の全国経理協会簿記検定試験2級合格率が90%を超えるという成果に結びついている。

習熟度別学習は「個々の力に合わせてしっかりと学習するためのもの」であることを生徒に理解させ、「簿記」をやればできるという自信をつけさせる授業として学習の柱とした。

(2) 科目間の指導のリンク

生徒には、簿記はビジネス基礎で説明された経済社会を会計言語というツールを使って理解するものであり、決して別々のものではないということを徹底して教えている。これにより、共通に学ぶ項目については、相互に意識づけと理解を深める工夫をした。その結果、ビジネス基礎の学習により、今、何をしているのか、なぜこの記帳になるのかがわかるようになったという生徒の声が多く出てきた。より理解が進んだことがひとつの成果である。

単元ごとの最後に発展的・応用的な事例を示すことは、継続的に学習意欲を持続させることにつながっている。生徒は今まで設問の意味さえわからなかった問題が解けるようになり、問題集においても発展的・応用的な問題を中心に取り組むようになった。

(3) 学習成果確認のサイクル

商業高等学校の学習成果の確認方法の一つに全国的な規模で実施される検定試験がある。これまで、検定試験の合格により、他の生徒や学校を訪れる人たちから賞賛をうけ、生徒が誇らしげな表情をしている姿が多く見られた。基本問題の繰り返しにより学習を定着させ、生徒一人ひとりがそれぞれの学習の状況に応じて、検定試験を活用して到達度を確認、自信をつけて、発展的・応用的な問題に意欲的に取り組むという学習サイクルが出来上がった。

(4) 科目間連携の拡大と充実

資格取得や部活動に多忙な生徒の状況を考慮すると、科目間連携の取組を拡げていく必要がある。教科・科目を超えた、科目間連携を視野に入れた、指導方法の改善が課題となっている。